

昭和初期日本における野球留学生の誕生と 浄土真宗本願寺派台湾布教の関係性

—平安中等学校野球部の台湾人留学生に着目して—

本庄 良仁

本稿では、浄土真宗本願寺派(以下、本願寺派)を母体を持つ宗教系の学校である平安高等学校の野球部(以下、平安野球部)に着目し、本願寺派の海外布教との関わりから、昭和初期日本における野球留学生の誕生とそのライフコースについて検討した。ここで明らかになった知見は以下の通りである。

第1に、本願寺派が日本による台湾統治と歩調を合わせるかたちで展開した台湾開教事業・布教活動を究明し、そこで本願寺派の人的なつながりが形成され、後に台湾人留学生を誕生させる回路となったことを明らかにした。具体的には、本願寺派は台湾統治初期から政府の原住民統治政策の一翼となりながら布教活動に従事し、他宗派よりも積極的かつ広範囲におよぶ布教の成果を挙げていた。その中でも、本願寺派による台湾布教の特色といえる東海岸地域の花蓮港布教所に着目すると、花蓮港駐在の布教使として着任していた武田善俊という人物が、布教所の構成員として、花蓮港の人々と親交を深めながら布教活動に意欲的に取り組んでいた。そして、原住民が内地日本に移動を行うにあたり、武田が回路の担い手となっていた。

第2に、台湾における野球の歴史を紐解き、台湾の原住民がどのように日台間の宗教的な回路を通じて平安野球部に留学することになったかという過程を検討した。特に台湾人留学生のルーツである、花蓮港で結成された原住民野球チーム「能高団」の活動を振り返り、能高団の選手たちは台湾国内や内地日本への遠征を通じて、突出した野球能力の高さを見せつけたことが内地の人々の注目を集め、平安中等学校(以下、平安中)への留学のきっかけになっていたことを明らかにした。そして、野球部の強化を画策していた平安中は、能高団の中でも特に大きな活躍を見せていたロードフ、キサ、アセンという3名の選手を、上記した花蓮港布教所の駐在布教

使であり、かつ平安野球部 OB の武田を通じて平安野球部に入部させていた。

第 3 に、こうして外地台湾から日本に来た台湾人留学生の野球活動とその日台における人々の評価について考察した。そこで台湾人留学生が高いパフォーマンスを発揮することで、平安野球部の高度化に大きく貢献するが、その活躍は外地や内地の人々から多様な眼差しを向けられていた。例えば、外地と内地のメディアは、台湾の誇りや愛される助っ人像といった好意的な眼差しを向け、他方で、一部の内地メディアでは台湾人留学生が原住民であるという異質性を強調した、差別的にも見える「蕃人イメージ」を投影していたことが浮かび上がってきた。

最後に、平安野球部の台湾人留学生の中でも、突出した能力を見せていた伊藤次郎(=ロードフ)に着目し、そのライフコースについて検討した。伊藤はその並外れた野球能力の高さを見出され、中学卒業後には当時の日本野球界で最も隆盛していた東京六大学リーグに駒を進め、大学卒業後にはプロ野球選手となった。他方、本願寺派が台湾人留学生たちを平安中に入学させた目的は、平安中卒業後に本願寺派の僧侶として育成し、台湾で布教活動に取り組ませることにあった。つまり、伊藤にとって野球という文化は、本願寺派が留学生に抱いていた思惑を越え、内地日本社会で生活する足掛かりとなっていたことが明らかになった。

以上を踏まえれば、本稿における、本願寺派の海外布教と平安野球部における野球留学生の誕生を関わらせて読み解く試みは、これまでの研究では見られなかった、宗教とスポーツという社会科学領域を架橋し、双方の研究を豊富化する一助となれるだろう。

次いで、従前の研究では、野球によって文明化したと考えられていた台湾の原住民に対して、内地における卓越したパフォーマンスゆえに「蕃人イメージ」が投影されていた事実からは、日本とは異なるものとしての「内なる他者」としての台湾人の姿が見てとれた。

また、本願寺派が台湾布教を進めていく上で困難を極めていた原住民への布教を推し進めていくための僧侶として育てるべく留学させた彼らが、宗派のねらいを越え、平安中を卒業後に野球の力量を買われて内地日本の六大学野球に進み、さらにはプロ野球界に足を踏み入れた事実は過小評価されるべきではないだろう。なぜなら、そこからは、従前の研究では見逃されていた、野球の競技力によって、内地日本社会で認められ、逞しく生きていく原住民の様子が明らかになるからである。